公園の芝 自ら手入れ

つくば住民団体 本格活動、交流の場に

つくば市が管理する公園の芝を、地域住民有志らが手入れするボランティア団体「つくばイクシバ！」(大東絵理子代表)を東京の企業などが立ち上げ、7月から本格的に活動を始めた。大東代表は「住民たちの居心地の良い場を、住民たちの手で育ててもらうのが団体のモットー」と意気込む。

「地域住民が主体となり同公園の美しい芝生を守っていく場所をつくりたい」と、竹園西広場公園と隣接する分譲マンションの一体的開発を行った「フージャースホールディングス」(東京)が発足を呼び掛け、公園横に秋から新店舗を構えるパン屋「クーロンヌジャポン」や地元の不動産「誠商事」、近隣住民が協力して6月に同団体を立ち上げた。

芝刈りを前に、芝刈り機の使い方の説明を受ける、つくばイクシバーのメンバーら＝つくば市竹園(提供写真)

7月11日、公園に集まった約10人が、雑草を抜いたり小石を取り除いたりした後、芝刈り機で手入れを行った。芝刈りと肥料を与えた後の水やりは、雨が降りそうだったため省き、活動を終えた。

活動に参加した近所の女性は「市が公園の手入れをするのが当たり前だと思っていた。自分たちの手で芝を育てるのは思いのほか面白く、集まって話すのも楽しい。今度は知り合いを誘いたい」と話した。

同団体の活動をサポートしている、公園の芝の手入れを行う東京のボランティア団体「イクシバ！プロジェクト」のメンバーが参加し、芝の特徴や手入れの仕方を説明した。新型コロナウイルス感染防止のため、活動開始前のミーティングはビデオ会議アプリ「Zoom(ズーム)」を使って行ったという。

団体の今後の活動について、大東代表は「継続していくことが大切。当面は毎月第2土曜の活動にする」という。「『時間空いているし、ちょっと芝でも刈ろうかな』というように気楽に参加できる団体にしたい。地域の交流の場に育てたい」と語った。

(木村優斗)

新たに土入れ 練習拠点整備

日立ラグビー部 サンネクサス

地元企業が協力 選手ら地面ならし

社会人ラグビーのトップイーストリーグに所属する日立製作所ラグビー部「サンネクサス」のメンバーは、練習拠点とする会瀬グラウンド(日立市会瀬町)の環境悪化に伴い、地元企業の協力を得て土入れ作業を行った。新型コロナウイルスの影響で試合日程などの先が見通せない中、選手たちは感染症対策を徹底して練習に励んでいる。関係者は「今こそスポーツの力で地元を元気にしたい」と意気込む。

社会人ラグビーはトップリーグ、トップチャレンジリーグの下に、全国を3地域に分けたリーグがあり、サンネクサスは2018年度、初めてトップイースト・ディビジョン1に昇格を決めた。19年度は10チーム中8位で残留した。

チームはさらなる上位を目指し、本年度はトップリーグ経験者をヘッドコーチ(HC)に招き、昨年の茨城国体で活躍した選手など新人6人を加えて戦力強化に力を入れる。

ただ、練習環境は他のチームに比べて厳しい。硬い土のグラウンドは膝や腰に負担がかかるため、普段は雑草が生い茂るスペースを使っている。だが、激しい練習によって地面に穴が開き、けがをする危険性があったという。

チームディレクターの尾又信次さん(45)らは、総合建設業の秋山工務店(同市大沼町)に整備の相談を持ち掛けたところ、「地元チームを応援したい」と10トントラック1台分の土の提供を受けた。

作業は選手やスタッフ2人が参加して5時間ほど運んだり、汗を流したりして「できることはしたい」と話した。

新型コロナ禍でチームは「時間をかけてできるようになる」と6月から練習を再開した。今シーズンは例年の9月